

ハート to ハートの交流を重ねて —原子力・放射線の理解推進活動—

橋内久美

WIN-J 茨城

原子力の仕事をする女性たちのグループ WIN (Women In Nuclear-ウイメン・イン・ニュークリア: ウィン) は、世界 60 ヶ国に約 2,000 人の会員を持つ団体で、原子力の専門家である女性たちが、一般の方に分かりやすい広報活動を行うことにより、原子力や放射線に対する理解を広めてゆくことを目的として、さまざまな活動を行っている。ウィンの日本組織を WIN-Japan (ウイン-ジャパン、会員数約 200 名、以下 WIN-J) といい、その中で、私たち茨城県東海村にある原子力関連企業に勤めるメンバーで構成している組織を、WIN-J 茨城と呼んでいる。

WIN-J 茨城とは、東海村に企業がある、原子燃料工業(株)、原電事業(株)、(独)日本原子力研究開発機構、日本原子力発電(株)、日本レコードマネジメント(株)、三菱原子燃料(株)から 1~5 名程度の WIN-J 会員が集まったの集合体である。企画ごとに茨城地区でプロジェクトメンバーを募り、原子力や放射線に関する理解促進活動を行って、地域の方々とはハート to ハートの交流を続けてきている。

茨城地区では、2000 年の WIN-J 第 1 回女性交流会 in 東海村を開催してから、毎年 1~2 回のイベントを

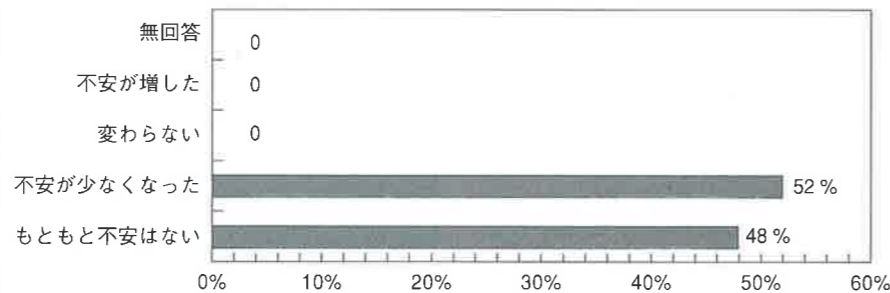


図1 低線量放射線に対する不安感は講演会や意見交換会後変わりましたか？ (サンプル人数: 25人)

重ね、先日は第 7 回女性交流会を実施したばかりである。第 1 回、2 回は WIN-J が主催したが、第 3 回以降は WIN-J 茨城が主催している。第 3 回以降の企画をする際に大きな原動力になっているのは、参加くださった地域の方々の「原子力や放射線のことを学びたい！」という気持ちが強かったことだったと思う。

研究者の説明によって不安感から理解へ

昨年実施した第 5 回交流会では、電力中央研究所での低線量放射線の研究についての見学と、研究者の方との交流を行った。参加者は、約半数が放射線や JCO 事故についてグループ等で勉強されている方、残りの半数はその方たちから、「めったに見られないところが見学できる」という言葉に誘われて参加したお友達であった。

茨城地区の参加者は JCO 事故の記憶があり、原子力や放射線に対する

イメージはあまりよくない。参加事前アンケートでは、「放射線はどんなに少なくても有害かもしれない、という不安はありますか？」という質問に対して、参加者の約半数が「不安がある」との回答であった。

しかし実験設備を見学し、研究者から低線量研究の講演を聴き、WIN メンバーと参加者の方を交えた少人数のテーブルトークでさまざまな質疑応答を行ったことにより、事前アンケートで不安があると回答された方全員が、「不安が少なくなった」と放射線に対する不安感が減少されたことが分かった(図 1)。

これは、低線量放射線について、ラジウム温泉やラドン温泉、医療分野での応用研究など身近な例をあげて説明があったこと、研究結果を写真やグラフで視覚的に分かりやすく説明があったこと、またテーブルトークで、参加者の疑問や不安感に対する回答が、研究者らしい視点から説明がなされたこと、が理由で不安感を減少させたと考えている。

事後アンケートでは、放射線に対して、「科学技術や医療分野として利用・活用してほしい」という意見が多くなった。そして見学会や交流会で得た知識を、ご家族や友人の方にもお話しすることができるという方が約 8 割という結果を得た。

原子力事業者を多数抱える東海村では、安全性や事故やトラブルが発生した場合の対応についての説明が多く、原子力や放射線の有効活用などの理解促進活動が少なくなりがちなので、原子力に対して、有効活用よりも恐怖感を覚えるような感想をもつ方が多くなってしまふ。もっと有効利用している分野や、医療分野の研究などの情報提供も必要なのは、というご意見も参加者からいただいた(写真 1)。

JCO 事故もテーマに

今年 6 月の第 6 回は、過去すべての交流会時に話題に上った「JCO 事故」に焦点を定めた。地域の方々の感じている疑問・不安を払拭し、原子力との共生について知識を広げ、理解を深めていただくために、「今、未来に向けて一緒に考えてみませんか。JCO 事故をきっかけに原子力とどうつきあっていきますか？」という企画で交流会を実施した。東海村から事故当時の対応をされた職員の方を迎え、村の当時の対応やその後実施された対策について講演を聴くとともに、2 時間半のテーブルトークを行った。

この企画で、茨城地区では、JCO 事故の記憶はまだ生々しく残っていること、また、事故当時は、人体へ



写真 1 低線量放射線をテーマにした第 5 回交流会風景

の放射線の影響に対して最も不安感を感じていたが、事故後 6 年たった今は、事故の再発に対する不安感が最も強いことが分かった。参加された地域の方々からは、原子力従業員への教育訓練の確実な実施を求める声が非常に強く、また次世代への教育の重要性についても多数の意見が出ていた。やはり茨城では、JCO 事故がいろいろな意味でのきっかけになっていることを痛感した(写真 2)。

信頼感から生まれる積極的な視点

第 7 回では、原子力緊急時支援研修センターと茨城県原子力オフサイトセンターの見学を行った後、関西原子力懇談会の方々と茨城地域の方々との交流を行った(写真 3)。グループごとにいろいろなテーマでテーブルトークを行った。ほとんどの質問に対して、茨城地域の方々が回答してくださり、WIN-J 茨城としては、この 7 回で地域の方々との間に生まれた信頼関係を感じる交流会であった。

関西地区との交流会の後、茨城地域の方から、「関西の方から JCO のことや東海村のことを聞かれても答えることができなくて反省した。これからは自分から地元のことを学び、原子力や放射線についても積極的に



写真 2 JCO 事故をテーマにした第 6 回交流会



写真 3 第 7 回交流会では原子力緊急時支援研修センターを見学

学んでいきたいと思う」との発言があった。

WIN-J は今年度設立 5 周年となり、さらなる発展のときを迎えた。この方の発言にあるように、WIN-J では、正確な知識を伝えるだけではなく、参加された方の「学ぼう」というポジティブなモチベーションを与えることのできる“ハート to ハート”の交流活動を今後も続けていきたいと思う。



[きつない・くみ WIN-Japan 会員、(独)日本原子力研究開発機構]